自由研究発表　第１室　⑤　（13:50～14:20）SNS×

児童の英単語認識に関する研究 －「音声、意味、文字」の関係に注目して－

巽 徹（岐阜大学）
川端 奏海（飛騨市立神岡中学校）

本研究は、小学校４～６年生児童の英単語認識における習得順序や、英単語認識に影響を与える要因を明らかにしようとするものである。鳥取県、岐阜県、滋賀県の公立小学校５校の協力を得て、計 518 名の児童を対象に英単語認識に関する「英語クイズ」を用いた調査を実施した。クイズでは、中村(2003)の多角的語彙習得モデル、金山(2021)の語彙知識処理過程モデルを基に、英単語認識における「音声と文字」「音声と意味」「文字と意味」の繋がりを問う問題を作成した。

「音声と文字」では、英語の音声を聞いて綴りを選んだり、綴りを見て英語の音声を聞いて選んだりする問題とした。「音声と意味」では、「音声と文字」で出題した語彙を用いて、音声を聞いてその意味を表す日本語を選ぶ問題とした。「文字と意味」では、英語で表記した４つの単語のうちから一つだけ異なる種類の単語を選ぶ「仲間外れ問題」とした。

調査の結果、「音声と文字」「音声と意味」の繋がりでは、対象とした単語で「音声から意味」よりも「音声から文字」の正答率がいずれの学年でも高くなった。５，６年生ではどちらの正答率も８割を超えて差は見られなかったが、４年生では、両者の正答率が異なり、英語の音声を聞いて、意味は分からないが単語の綴りを選ぶことができる児童が一定程度存在することが分かった。これは、児童の語彙習得では「音声から意味」の繋がりが強く最初に習得されると言われる先行研究とは異なる結果となった。「文字と意味」の繋がりでは、「単語の意味」に注目する児童と、単語の長さや語頭の文字の違いなど、「単語の見た目や形」に注目する児童とが存在することが分かった。過去３年間の「仲間はずれ問題」の調査結果から、児童の総英語学習時間が増加するにつれ、単語の「形」から「意味」に着目する児童の割合が大きくなることが分かった。また、単語の種類によって「意味」「形」の着目度合いに差があることも明らかになった。

自由研究発表　第１室　⑥　（14:30～15:00）

小学校英語教育における英語リスニングテスト ～絵 MET 開発・実施による結果分析～

清水 万里子（岡崎女子大学）
牧 秀樹（岐阜大学）

本発表は、私たちが開発した絵 MET を紹介し、K 市で実施した調査の分析結果を提示する。牧ほか (2003)は、最小英語テスト (= The Minimal English Test (通称 MET))を開発し、MET は、主要な英語力測定テストと相関があることがわかっている（詳細は牧 (2018)参照）。絵 MET は、MET を改良したテストで、音声を聞いて合う絵を選ぶだけの簡易型英語テストである。本調査における絵 MET は K 市の児童が使用している教科書で扱う語彙と文章のみを使って作成された。発表者の一人は、岐阜県 K 市における「小学校英語コミュニケーション事業」（2013 年４月～2023 年３月）に 10 年間取り組んだ。その間、４技能習得のうち特に聞く力（リスニング）の育成に注力し、事業最終年度の 2022 年 12 月に高学年を対象に絵 MET を実施した。市内の３小学校の協力を得て、５年生 158 名、６年生 176 名に実施した。その結果、５年生で 91%の正答率、６年生で 85%の正答率を得た。これは、その学年までに教えられた内容について、リスニング力がしっかり育っていることを示唆している。また、絵 MET と同時に情意面についても４件法でアンケートを実施した。分析の結果、スコアと情意面には統計的有意な相関がなく、スコアが高いから英語が好きであるとは言

えないことが明らかになった。事業がスタートした10年前と現在の違いは、2020年度における「教科化」で英語が評価科目になったことと、文字学習が始まったことである。10年前は80%～90%の児童が「英語が好き」と回答していたが、今回は、好きと答えた児童が減少していた。その要因については、3点指摘できる。①教え方・学び方のパターン化、②そもそもコミュニケーション活動が苦手、③読み・書き学習が苦手。

自由研究発表　第１室　⑦　(15:10～15:40) SNS×

小学校外国語科におけるCAN-DOリストを活用した話すこと［やり取り］の指導－会話を続けることに焦点を当てて

町田 伊玄（長野県小諸市立東小学校）

本発表は小学校６学年の外国語科の授業において、CAN-DOリストを活用して話すこと［やり取り］の指導に焦点を当てた実践報告である。 実践前に発表者は話すこと［やり取り］の授業において、児童の会話が継続しない様子が気になり、会話を継続するための指導の在り方はどうあったらよいのかという問いを持っていた。 令和６年２月に６学年３０名を対象に外国語科Junior School Life「中学校進学に向けて友達を応援し合おう」(Here We Go! 6 Unit 9) の単元を設定した。

指導のポイントとして単元実施前にCAN-DOリストの話すこと［やり取り］の目標の整理と、思考力、判断力、表現力等に関する目標を追加した。また、児童にはCAN-DOリストに準拠したやりとりのポイントを提示した。話すこと［やり取り］の指導については『小学校外国語活動　外国語科　基本の「き」』(酒井, 2023)のDo-Learn-Do Againに基づいて指導をした。Do-Learn-Do Againは「言語活動を自分の力でやってみる（Do），必要に応じて学ぶ (Learn), 類似の言語活動を繰り返す (Do Again)」ことである。

単元の最初と最後の２回、CAN-DOリストに基づいた質問紙を４件法で行った。２回目の質問紙には単元の感想を自由記述で記入した。また、単元の最後に児童と教師でやりとりのパフォーマンステストを行い、録音した。授業後には教師が振り返りを記録した。 質問紙の結果は１回目と２回目の各質問についてクロス集計を行った。パフォーマンステストについては発表者が録音を聞き、単元計画の評価基準と照らし合わせてA, B, Cの３段階で評価を行った。

主な分析の結果として、質問紙における①質問をすること、②１分間会話を続けることができたと感じる児童の数が単元実施前よりも増えていた。 実践後の考察として、Do-Learn-Do AgainのLearnにおいて知識及び技能に偏った指導になったことが課題として挙げられた 。指導の在り方については質問紙の結果から、話すこと［やり取り］の指導においてCAN-DOリストに基づき、指導のポイントを意識することがよい可能性が示唆された。

自由研究発表　第２室　⑤　（13:50～14:20）

やり取り領域における小中連携授業の成果と課題

渡辺 千愛実（高岡市立伏木小学校）
吉崎 理香（富山国際大学）
岡崎 浩幸（富山大学）

本研究の目的は、小学６年生が中学１年生に対して、中学校生活についてインタビューする形式でやり取りをし、そこで生じる課題意識と達成感を通じて、双方に英語学習に対する意欲の高まりが見られるかどうかを解明することである。リサーチクエスチョンは、小中連携授業において、①小・中学生はやり取りのどのような場面で課題意識や達成感をもつのか、②小・中学生でやり取りの機会を設けることは双方の英語学習への意欲にどのように影響するか、を明らかにすることである。これによって、小中連携授業の効果を示し、英語学習における小中連携授業の広がりに寄与したい。

本実践は、２０２４年２月、小学６年生を対象に、Here We Go!6（光村図書）Unit9 “Junior High School Life.”の学習において、中学校生活に見通しをもち、その生活に期待と希望をもつことを目的として、やり取り領域の授業を行ったものである。中学校生活における期待や不安を友達に伝え合うためには、中学校生活についてある程度知っておく必要がある。そこで、中学校生活について伝えるための必要な語彙が定着した段階で、中学１年生とインタビュー形式のやり取りを１回実施した。その後再度、小学６年生は友達とのやり取りする活動を継続して行った。

小中連携授業後に、両者にアンケート調査を行った。また、児童・生徒両者のやり取りの会話分析も実施した。その結果、小学生には中学生から欲しい情報を得るという目的を達成できた達成感、中学生にはパラフレーズする技能の高まりが見られ、双方にはそれぞれの課題意識から今後自分にどのような学習が必要かを理解し、それを成し遂げたいと思う意欲が高まったことが分かった。これらの結果を基に、小中連携授業でのやり取り領域における成果と課題を提示したい。

自由研究発表　第２室　⑥　（14:30～15:00）SNS×

ICT を活用した小学校外国語科の授業実践と効果

Jihyang, HYUN（岐阜大学教職大学院研究生）
瀧沢 広人（岐阜大学）

１　実践研究にいたる過程 筆者は、名古屋市の非常勤講師として、外国語授業の主担当として高学年に英語を教えた。児童が英語に多く触れる機会を増やすために、ペアやグループ・ワーク等、学習形態に工夫を取り入れたり、音声で十分に慣れ新しんだ簡単な語句や基本的な表現を書かせたりしながら、児童の話す力を高めようとした。しかしながら、１学期の児童の様子から、紙のワークシート教材で授業を行うことに限界を感じていた。そこで、「ICT を用いた授業を行うことで、児童は意欲的に学習に取り組むのだろうか」という問いを抱き、実践研究に取り組んだ。

２　実践研究の取組 ①発話内容の整理 ペアやグループでのやり取りでは、Small Talk を行う前に前時に学んだ単語の練習を繰り返し、意識を与える。その際に、児童の発表内容を整理するために、タブレットを用い、マインドマップやブレインストーミングを作成させて自分が好きなことや伝えたいことをペアやグループで意見をシェアさせる。 ②発話のイメージづくり ロイロノートに自分のオリジナルシナリオを作成し、話すことのやり取りのイメージを作らせる。その

後、ペアでお互いに伝え合い、リアクションの工夫をどの場面で取り入れるか振り返りを行う。また、自分が発話する際に、どのような形で話すのか、目標を考えさせ、オリジナルシナリオに記述する。 ③発話のための資料作り 発表に必要な写真やイラストをスライドに張り付けたり、文字を入れたりするなど、発表の資料づくりをロイロノートで行う。

３　成果 年度末にアンケート調査を行った。その結果、ほとんどの児童が、ICT を用いた授業を好意的に受け止めていることも分かった。実際、児童の授業での様子を観察しても、創意工夫のある資料作りができており、児童の主体的・意欲的な面が見られていた。また、各単元末における発表では、全児童がクラスの前で、友達とやり取りを行うことができた。

自由研究発表　第２室　⑦　（15:10～15:40）SNS×

相手意識を持ち、つながりやまとまりのある内容を書く指導実践

内記 大地（富山市立東部中学校）

本発表では中学３年生を対象とした書く指導の実践を報告する。単元末に生徒が相手意識を持ち、つながりやまとまりのある内容を書くパフォーマンステストを設定した。 単元は New Horizon English Course 3（東京書籍）の Unit 4 Be prepared and Help Work Together であり、題材は日本の防災や外国人支援についてである。単元末には 50 語以上で「ALT の先生が安心・安全に富山で暮らすことができるように、富山の防災についてメッセージを書こう」と目的・場面・状況を設定した。 生徒がパフォーマンステストの課題に対して適切な内容を書けるようにするために、防災クイズ、防災グッズについての Small Talk と Small Discussion を帯活動で行い、生徒が防災についての情報を得たり、考えたりできるようにした。また教科書の本文の内容に関する推論発問や NHK アーカイブス「外国人たちの震災体験」を生徒に視聴を通して、生徒に被災した外国人の心情を考えさせ、どのような声を掛けや支援ができるかを全体で共有した。

このような指導を取り入れた結果、授業者が作成したルーブリックに基づいたライティングの評価から、75%の生徒が相手意識を持って、ＡＬＴの先生につながりやまとまりのある具体的な防災アドバイスを書くことができた。授業後の生徒の振り返りにも、友達の意見を参考にしたり、現実味のある内容で真剣に取り組むことができたりしたと述べていた。発表では生徒が書いた英作文を紹介する。

Over the NEW HORIZON

NEW HORIZON LINE公式アカウント

NEW HORIZONをお使いの先生を全力サポート!

小学校英語 ID @horizon-e

中学校英語 ID @newhorizon

小学校英語

NEW HORIZON プロジェクト

英語を学ぶワクワクと世界を知るドキドキを伝えたい。
そんな思いで、ベーカー先生をはじめとした個性豊かな
キャラクターたちが教室の外へと飛び出します。

最新情報はこちらの特設サイトから

関連商品 好評発売中!

NEW HORIZON 青春白書
Unit 1 新学期がはじまる前に…
定価1,100円(税込)

エレン・ベーカー先生
はじめての英語教室
定価1,430円(税込)

東京書籍

本社 〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1 Tel:03-5390-7304(英語編集部) Fax:03-5390-7300
支社・出張所 札幌 011-562-5721 仙台 022-297-2666 東京 03-5390-7467 金沢 076-222-7581 名古屋 052-950-2260
大阪 06-6397-1350 広島 082-568-2577 福岡 092-771-1536 鹿児島 099-213-1770 那覇 098-834-8084
ホームページ https://www.tokyo-shoseki.co.jp 東書Eネット https://ten.tokyo-shoseki.co.jp

自由研究発表　第３室　⑤　（13:50～14:20）

聴覚障がい児を対象とした中学校英語における読むことと書くことの言語活動の指導改善－話すことや聞くことと関連させて－

羽柴 直弘（福井県立ろう学校）

本発表は、ろう学校の中学部１年生（生徒１名）を対象に、読むことと書くことの指導改善を図った実践研究である。本研究における問いは、どうすれば生徒が意欲的に読むことと書くことの言語活動に取り組めるかということである。この問いをもった経緯は次の通りである。発表者は、令和３年７月から、聴覚障がい児が意欲的に話したり聞いたりすることができるようにと、新出単語や教科書の本文に、カタカナで読み方（発音）を表記した教材を使いながら、話すことと聞くことの言語活動を促進してきた。この実践の中での授業研究会において、ろう教育や英語教育を専門とする大学教授から、今後の課題として「読むことと書くことの言語活動を充実させるとよい。」と助言を受けた。これまでの授業動画を振り返ると、意欲的に話したり聞いたりする姿勢は見られるものの、英語の文章を読んだり書いたりすることには意欲的な様子が見られないことや、特に書く活動については、活動そのものがあまり設定されていないことに気づいた。

そこで、話したり聞いたりする活動と関連させながら、読むことや書くことの活動が可能ではないかと考えた。読むことにおいては、読む前に、教科書のイラストを基に教師とやり取りをした後に、読解に取り組めるようにした。書くことにおいては、読んだことを基に教師とやり取りをした後に、自分の意見を書く活動に取り組めるようにした。

令和６年４月に、対象生徒に行ったアンケートでは、「内容を想像してから読むことで、読みやすくなった。想像と違うときは意外性があって面白いと思うようになった。」「最初は、Yes・No しか書けなかったが、自分の意見を書いて伝えることができたときに楽しいと思うようになった。」と回答した。

本発表では、読むことと書くことに焦点を当て、授業での教師とのやり取りや生徒が記述した英語表現の分析に基づいて、実践の成果を報告する。

自由研究発表　第３室　⑥　（14:30～15:00） **SNS×**

The Effects of Lessons Using English Websites

Yoshio, KANAMOTO（National Institute of Technology, Toyama College）
Hiroyuki, OKAZAKI（University of Toyama）
Kenichiro, ISHIZU（University of Toyama）

This study aims to examine whether using English websites during English lessons can improve junior high school students' motivation, learning behavior outside the classroom, and reading ability. The students (n=155) were assigned to either an intervention group or a control group. The intervention group took seven lessons utilizing English websites over six weeks. The students read the content of the English websites and performed pre- and post-activities such as conversations in pairs and presentations based on the website content. The students could use a web browser's built-in translation service to understand the content, though they were required to use English to fill in worksheets and talk about the content. Meanwhile, the control group studied English only with non-authentic materials, primarily a textbook.

Pre- (Time 1) and post- (Time 2) questionnaires and reading tests were administered, and the results were analyzed by a linear mixed effect model (LME). Additionally, a supplementary post-questionnaire was answered by the intervention group. Means, standard deviations, and the Pearson's correlation coefficients were calculated.

The mean scores for the supplementary post-questionnaire suggest that understanding the website content may not be too difficult for the students. The scores also imply that web-based content, lessons using websites, and pre- and post-activities are interesting to students, and they appear to be interested in exploring using English websites more. Additionally, the correlations indicate that teachers should not worry too much about the difficulty of English websites, while careful management of lessons might be necessary to optimize the use of such materials.

The results from the LME demonstrated significant time effects at Time 2 in both groups on three motivational factors, two learning behavioral factors, and reading ability. In addition, the results revealed the intervention group significantly outperformed the control group in intrinsic value and attainment value at Time 2. The results suggest that English websites can be used as effectively as textbooks to enhance students' motivation, learning behavior outside the classroom, and reading skills. Lastly, the use of English websites in lessons may be beneficial to improve students' motivation in terms of intrinsic value and attainment value.

自由研究発表　第3室　⑦　(15:10～15:40) SNS×

How to Teach "Paraphrasing Questions" of English to Learners

庄司 椋哉（南山大学大学院生）

When English learners take classes at school, they encounter "paraphrasing questions" such as "Put the right words into parentheses to make sentence B equal to sentence A." Let me give you an actual example. (1) a. Osaka has more bridges than any other city in Japan.　b. No other city in Japan has (　) many bridges (　) Osaka.　In the author's memory, when he was a student in junior high and high school, he was not given any explanations about the differences between these two by teachers. Therefore, he had to learn answers by heart that got him in trouble. However, if he understood the differences between two sentences at that time, his English learning would have been motivated and less burdensome.

This study explores (A) the differences between targeted sentences in "paraphrasing questions", where they allow us to describe the same situation in various ways in reference to Cognitive Linguistics and other conceptual tools and (B) proposes how to teach "paraphrasing questions" in classes based on the analysis of actual examples.

The methodology of this study involves three main steps: collecting actual examples from textbooks and exercise books, categorizing and analyzing actual examples primarily from the perspective of Cognitive Linguistics and proposing a teaching method of "paraphrasing questions". The author's analysis revealed that the differences between the targeted sentences in "paraphrasing questions" can be explained following these conceptual tools: "Focusing", "Viewpoint", "Situation focus and Person focus", "Figure and Ground reversal", and "Discrete scheme and Integrated schema." In short, the differences in which conceptualizers highlight in a situation enable them to express the same situation in some ways.

In terms of teaching, teachers should make an opportunity to make students recognize the macro perspective that “the differences of targeted sentences in “paraphrasing questions” are motivated by the construal differences” to better understand “paraphrasing questions”.

自由研究発表　第４室　⑤　（13:50～14:20）

思考力の向上を目指したグループ・ディスカッションの実践：日本人大学生の認識の調査

久保 佑輔（福岡大学）

本発表では、思考力の育成を目指したグループ・ディスカッションに対する大学生の認識の調査を通して、実践の改善点を探ることを目的とする。 現在の日本の英語教育では、情報や意見を効果的に伝えるための発信能力や、目的に応じて情報を精査したり多面的に考察したりする思考力の育成も求められている (文部科学省, 2018)。このような能力を育成する手段として、本実践ではディスカッションを採用した。ディスカッションでは、トピックに対する自身の意見の精査や、ペアの意見を聞くことで様々な観点から考察する機会を設定することが可能である。そのため、ディスカッションは思考力の育成との親和性が高いことが報告されている (e.g., Browne & Freeman, 2000)。そこで Kubo (2024) は、大学生の思考力の育成に対するグループ・ディスカッションの効果を調査した。このディスカッションの主な流れは次の通りである : (a) トピックに関するテキストを読む、(b) 自身の意見を整理する (プランニング)、(c) 1 回目のディスカッション、(d) 意見の修正・精査 (リバイス)、(e) 2 回目のディスカッション。各ディスカッションでは 1 人あたり 4 分の持ち時間があり、約 2 分で自身の意見を伝え、残り時間で他のメンバーと意見内容に基づいてやり取りをする時間を設定した。その結果、課題として主に次の 2 点が明らかになった : (1) 意見の修正・精査を学習者に促せていない、(2) 学習者にとって、やり取り時の質問提示は難易度が高い場合がある。 上記の限界点を踏まえて、本実践では Kubo (2024) から次の 2 点を修正した : (a) リバイス時に自身のパフォーマンスを振り返り、改善点を整理する時間を設ける ; (b) やり取りの際に質問シートを提示することで、学習者から多くの質問を促す。これら 2 点について、大学生 17 名を対象に選択式と記述式から成るアンケートを実施した。本発表では詳細なアンケート結果と、指導の限界点及び改善点について述べる。

自由研究発表　第４室　⑥　（14:30～15:00） **SNS×**

短大生の英語前置詞の誤用とその原因追究

西田 一弘（愛知産業大学短期大学）

日本人英語学習者にとって前置詞の習得が難しいと感じられる理由として、前置詞が多義であること、②英語の前置詞が日本語の概念に存在しないこと、をあげている（中西　2024）。英語は屈折語であり、主語と目的語は語順によって示されるのに対して、日本語は膠着語であり、主語と目的語は「助詞」によって示される。英語では目的語を示すのに語順だけで十分であるが、動詞の後に直接、目的語を置く場合と、動詞と目的語の間に「前置詞」を挿入させる場合がある。どちらを選択するのかは、動詞の意味が影響する（小川　2009）。 前置詞は自動詞の影響、他動詞の影響（前置詞は不要）、名詞の影響（「前置詞＋限定詞＋名詞」が基本形）、形容詞（過去分詞、現在分詞）、あるいは相互の影響を受け（動詞、名詞との力関係で、さらに各単語においても異なるので厄介である）、文中では多く使用される。英語では動詞の後に前置詞は必ずしも必要ではないが（他動詞の場合は必要ない）、日本語では動詞の後に助詞（格助詞）は必ず必要である。そのため、日本人英語学習者は「他動詞でも前置詞を挿入させる誤用」が多くなる、と予想されたが、実際は、仮説とは異なり、「挿入」は少なく（4 件　7．1%）、むしろ「脱落」（35 件　62．5%）が多かった。 これは Kaneko（2008）が、「動詞修飾の前置詞の誤用」が最も多く、特に、「前置詞を脱落させる誤用」が最も多く見られる誤用であると述べていることと合致する結果である。 日本人英語学習者は前置詞を日本語の助詞とは異なる別の概念と考えており（この考えは間違いではない）、自動詞とセットになるとは考えていないことが予想される。「自動詞＋前置詞＝他動

詞」のように、「動詞＋前置詞（不要の場合あり）」をまとめて理解すれば、このような誤用はある程度解消されると思われるが、前置詞は同時に文中で後述される名詞の影響を受ける場合もあるので、注意が必要である。

自由研究発表　第４室　⑦　（15:10～15:40）SNS×

Differences in Conversations Between Online and Offline Communication Among Japanese Learners of English: Focusing on the Ellipsis

和田 順一（松本大学教育学部）

This presentation is about differences in conversations between online and offline communication among Japanese learners of English, especially focusing on one of the communication features, ellipsis. It is variable to know the difference between these two modes of communication. This is because most students were forced to have lessons online during COVID-19 and they get used to having lessons in this mode to a certain extent. Moreover, MEXT (2021) also has been promoting the use of online tools in ordinary education. Communication with classmates or others can provide learners with good opportunities to acquire English in many ways. However, as you can imagine, there are some outer or superficial differences between online and offline communications. When using these tools, teachers should know not only these differences between online and offline communications but also how the output, which can be the input to the others, of the participants differ and what features these differences yield in their quality of utterances. This presentation reports the number of turns the participants took, how ellipses differ, and other features in these two types of conversations.

学研オンライン英会話
for School

公立校や
国立大学への
実績も

導入実績
200校
以上!

「話す」だけでなく、
「書く」も「考える」も
鍛える

学研オンライン英会話の特徴

ただ話すだけじゃない!
4技能5領域をしっかり鍛えることができる教材設計

レッスンはオフィスからお届け!
講師の質も通信の質も良いので、学校へのレッスン導入も安心 ※1

システムのダウンロードは不要!
サイトにアクセスするだけで、簡単にレッスンが受講できる

※1 緊急時でやむを得ない場合のみ、一部オフィス外からレッスン提供を行う場合がございます。

学校向け専用　人気コース

ロジカルスピーキング

CLIL※型教材
※内容言語統合型学習

特徴1 ロジカルに話す「型」を習得

英語で論理的に話すための「主張→根拠→結論」の型を繰り返し練習することで、自信をもって話せるようになるための基礎を身につけます。

特徴2 知的探究心を刺激し、思考力を養成

「将来の夢」など身近なことから、「動物実験」「安楽死」など多角的な視点が求められるとともに、正論・正解のないトピックスで学習者の知的探究心を刺激し、自分の意見の根拠となる「理由」を考えることで、英語力だけでなく思考力も養成します。

特徴3 入試や英検の二次試験対策にも!

トピックは大学入試の問題や英検などの外部試験などを分析し、選定。
ワークブックでは自分の意見をまとめるライティングページ、関連知識を深められるコラムページなどもあり、どの試験でも問われる「意見陳述問題」の対策にも効果的です。

学校向け
無料体験レッスン
申し込み受付中!

公式HPよりお気軽にお問合せください。
https://kimini.online/school/
学研オンライン英会話　教育機関　検索

株式会社Glats 学研オンライン英会話事務局
東京都品川区西五反田 2-11-8 学研ビル
school@glats.co.jp

自由研究発表　第５室　⑤　（13:50～14:20）SNS×

英単語テストが大学生の語彙学習方略に与える影響

境 奈津希（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科）

本研究は英単語テストの出題形式の違いが語彙学習方略に与える影響を与えるという仮説のもと、繰り返し同じ英単語テストを受けることによって学生の語彙学習方略にどのような変化が見られるのかを明らかにすることを目的に行われた。本研究では２つのクラスで英単語テストを実施した。一方は大学１年生向けの英語の授業で、受講者のうち 10 名を分析した。また、もう一方のクラスは大学 2 年生向けの授業で、受講者のうち 11 名を分析した。両クラスともに、単語の意味がわからない、英単語を適切に読むことが難しい学生が多いことから、英単語テストには日本語の意味を問うだけではなく、ディクテーションを取り入れた。英単語テストは４月から７月までの全 15 回の授業のうち 10 回、9 月から１月までの全 15 回の授業のうち 11 回実施された。４月の初回授業、７月の最後の授業、１月の最後の授業で語彙学習方略質問紙（水本, 2006）への回答を求めた。語彙学習方略質問紙には、語彙学習に対する考え方、メタ認知のコントロール、推測に関する方略、辞書使用方略、ノートテイキング方略、リハーサル方略、符号化方略、語の使用に関する方略の８つのカテゴリーが含まれており、全 80 項目が含まれている。カテゴリーの下位尺度得点をもとにした多変量分散分析の結果、質問紙に回答した時期に有意な主効果があり、ノートテイキング方略、リハーサル方略、符号化方略、語の使用に関する方略に有意な変化が確認された。ノートテイキング方略、リハーサル方略、符号化方略は４月から７月にかけて有意に上昇し、そこから１月にかけては値に大きな変化は見られなかった。語の使用に関する方略に関しては４月から１月にかけて値が上昇していく傾向が見られた。本研究の結果から、英単語テストを実施することで大学生の語彙学習方略に影響を与えるということが明らかになった。

自由研究発表　第５室　⑥　（14:30～15:00）

日本人英語学習者による一・二人称代名詞使用：ICNALE の英作文モジュールを用いたアジアの地域別比較

飯島 真之（神戸大学大学院生）

本研究では、現代英語における一人称代名詞（I や we）による自己言及（self-mentions）（Hyland, 2002; Hyland, 2005 他）及び、受け手に言及する二人称代名詞（you）に着目する。英語教育の観点において、学習者における人称代名詞使用、特に一人称代名詞使用については、これまで学習者コーパス研究の観点から、Hyland（2002）（香港の学習者を対象）、MacIntyre（2019）（日本人を対象）、成田（2017）（日本人を対象）等の先行研究において、頻度調査を含むさまざまな調査が実施されてきた。しかし、特に日本人英語学習者の一人称代名詞使用実態については、（1）日本人学習者と他のアジア圏地域の学習者との比較、（2）学習者１人当たりの平均使用頻度の調査、（3）受け手に言及する二人称代名詞（you）使用も踏まえた考察、（4）作文のトピック差を踏まえた考察といった点において、未だ調査の余地があるといえるだろう。そこで本研究では、アジア圏国際英語学習者コーパスである ICNALE の英作文ジュール（2 種のトピックの作文を含む）を用いて、アジアの地域別学習者が使用する一・二人称代名詞（I, my, me, mine, we, our, us, ours, you, your, yours）の頻度調査を、個別学習者ごとに実施し、日本人学習者によるそれらの使用実態を、国際比較を通じて考察する。アジアの EFL 圏６地域の学習者（日本、インドネシア、中国、台湾、韓国、タイ）及び母語話者の計７種のデータセットの頻度調査を先行して行った結果、（1）日本人学習者は、全体傾向として、I（活用形を含む）を母語話者や他の EFL 地域の学習者以上に使用するが、トピック別にみると、社会意見的なトピック（レストランの全面

禁煙の是非）において、母語話者との間に有意差が見られないこと、(2) you（活用形を含む）については、一人称とは異なり、全体傾向として、日本人学習者は母語話者との間に有意な差は見られないが、インドネシアを除く他の 4 地域の EFL 圏学習者は母語話者以上に使用することなどが示された。

自由研究発表　第５室　⑦　（15:10～15:40）SNS×

NPN 構文に関するコーパス分析―“hand in hand”に焦点を当てて―

藤原 隆史（松本大学）

英語には Noun Preposition Noun（NPN）構文と呼ばれる構文がある。Jackendoff（2008）等が NPN 構文に詳しいが、P 位置に前置詞 in がくる N in N 構文は hand in hand, arm in arm 等に限定され、先行研究ではあまり扱われていない。本研究では、N in N 構文のうち特に hand in hand に注目し、この構文がどのような性質を持っているのかを、British National Corpus（BNC）のデータを基に arm in arm との比較も交えながら考察する。

Hand in hand の使用例としては、I saw them making their way, hand in hand, down the path.（物理的近接）、For us, research and teaching go hand in hand.（比喩的近接）（共に COBUILD）等がある。この構文の詳細な特徴を明らかにするため、BNC における hand in hand の全使用例（274 例）を抽出し、(i)共起する動詞、(ii)出現位置、(iii)用法、(iv)構文的特徴などについて分析を行った。 結果として、主に以下の点が明らかになった。すなわち、(i)共起する動詞の約 66%が go でありそのほとんどが比喩的近接の意味で用いられていること 次に多く共起する動詞が walk の約 9%であること、(ii)出現位置としては約 89%が文頭であること、(iii)用法の約 26%が物理的近接であり約 72%が比喩的近接であること、(iv)構文的特徴として否定文が少ないこと等である。

上記の結果から、hand in hand は go との共起が圧倒的に多く、同じ N in N 構文である arm in arm が walk と共起することが多い（藤原, 2023）のとは異なる結果である。出現位置についても、arm in arm が文末/節末に多く出現する一方で、hand in hand は文頭に多く出現しており、同じ構文でも異なる結果となった。用法の違いも顕著であり、arm in arm が一部の例外を除いて物理的近接の用法が基本であるのに対し、hand in hand は比喩的近接の意味が主であることが分かった。教育的示唆として、同じ N in N 構文であっても 2 つの当該表現には大きな違いが見られるため、この構文を教授する際には上記で述べたいくつかの点に注意が必要である。本研究では、上記の内容を中心に N in N 構文の詳細な特徴に関する考察を報告し、そこから窺える教育的示唆を示す。

自由研究発表　第６室　⑤　（13:50～14:20）SNS×

教科書本文の簡易版を用いた読解および要約指導

神戸 玲子（目白研心中学高校）

日本の高校では、大学入試を意識して、生徒の習熟度よりも難しい教科書を選ぶ傾向がある。しかし、このような教科書と生徒の習熟度とのギャップが、高校での読解の授業で問題を引き起こしている。読解教材の語彙や内容の難しさにより、生徒が一読しただけでは内容を把握することが難しいため、生徒の学習意欲を低下させ、生徒の授業への態度も受け身になってしまうためである。

この生徒の英語のレベルとリーディング教材のギャップを埋めるために、リーディング教材の簡易版を作成し、授業内でリーディング活動の導入部分とポストリーディングで行ったライティング活動における足場掛けとして簡易版を導入した。本研究では、その簡易版導入の効果を検証した。本研究には、東京都にある私立高等学校の 3 年生男女 56 名が参加し、リーディングの内容確認テストの結果と参加者の要約と参加者へのアンケートを量的データとし、質的データとして参加者のインタビューの結果を用いた。分析した結果から、簡易版の導入がプレリーディング活動において参加者がリーディングパッセージの内容を把握することを助け、ポストリーディング活動において参加者の要約作成スキルを向上させる効果があることを示した。

自由研究発表　第６室　⑥　（14:30～15:00）SNS×

リーディングセクションに出現する英語関係節の頻度分布と統語機能の分析

南部 匡彦（長野県立大学）

英語関係節は日本人英語学習者には理解と産出の両面で習得が困難な項目とされており、その理由として (1)名詞修飾節の位置が L1 と L2 で異なること、(2)who, which, that 等の明示的な関係詞が L1 では存在しないこと、そして(3)教科書が英語の主要な入力源である EFL 環境下では関係節のインプットの量的な不足があること(深澤ほか, 2017)などが指摘されている。 本研究では、授業外でのリーディング学習における関係節のインプットの重要性に着目し、日本人英語学習者に広く認知されている公開テスト(TOEIC® L&R)のリーディングセクションに出現する関係節構文の用例をその出現分布・頻度・類型・統語的要因などの観点から量的・質的に分析をし、またリスニングセクションにおける同様の調査(Nambu, 2024)との比較考察を行った。

分析対象として、TOEIC® L&R 公式問題集(12 回分、総語数 71,676 語)のリーディングパート(Part5,6,7)からなるミニコーパスを構築して 255 の関係節を特定した。関係節を関係詞の格の情報と文内の修飾位置によって 4 分類すると、OS>OO>SS>SO となりリスニングセクションと同様の出現分布となるが、主節を修飾する副詞句や副詞的用法の前置詞句のなかに出現する関係節はリスニングセクションより大きな比重を占め、またその意味用法も特定の前置詞(in, to, by, on, with など)を伴い、多様であることが明らかになった。

以上から、TOEIC においては書き言葉と話し言葉の言語使用域(register)によって関係節の使用傾向が明確に異なり、学習者に関係節の出現特性を言語使用域に応じて明示的に指導できる可能性が示唆された。 本発表ではこれらの結果の詳細な分析に加え、英検の各級における関係節の出現傾向との比較考察も行い、報告をする。

自由研究発表　第６室　⑦　（15:10～15:40）

高校科目「英語コミュニケーション」と「論理・表現」における文法指導の検討―教科書における文法配列の観点から―

佐藤 選（東京学芸大学）

文法配列の在り方について、特に高校英語の文脈では現在までにほとんど検討されておらず、５文型と品詞の区分に基づく伝統的な文法配列に依る構成を採用する教科書は現在も多く存在している。自身の先行研究では、教科書分析の結果、「『英語コミュニケーション』と『論理・表現』の文法配列の不均等性」「『論理・表現』のみで特に認められる５文型を基盤とする文法配列傾向」および「出現頻度の観点から指導重要度が高いと考えられる表現と低い表現の区別がつかない紙面上の並列」（佐藤、2024）などの問題点が指摘されており、伝統的な文法配列からの脱却の可能性を含めた文法配列再検討の重要性は高い。本発表では、佐藤（2024）における分析結果に加え、今年度より使用が開始された「英語コミュニケーションⅢ」「論理・表現Ⅲ」の教科書における文法の取り扱いを新たに分析対象に加え、現在の高校英語における文法配列を検討し、その課題や修正案を提示することを目的とする。2024 年現在高校で使用されている「英語コミュニケーション」「論理・表現」検定教科書全種類を調査対象とし、各単元でターゲットとなっている文法事項の配列状況の傾向を調査した。分析の結果は上述の佐藤（2024）の結果を支持するものであり、網羅的に文法項目を取り上げる傾向は「論理・表現」が強く、産出活動を中心とする科目の立ち位置との不整合性が示唆される。また、「英語コミュニケーション」と「論理・表現」の文法配列の不均等性や、指導重要度の区別がつきにくい構成に関しても、先行研究と同様の傾向が認められた。本発表では特に、完了形・関係詞・接続詞の３項目を取り上げ、未来完了・関係詞の whose・接続詞＋分詞などの表現の取り扱い状況における結果などを提示し、文法配列・指導時期・「英語コミュニケーション」と「論理・表現」での取り扱いの区別に対する提案を行う。

祝 第53回 中部地区英語教育学会 富山大会

小学校・中学校

啓林館が
あなたの授業づくりや実践的な授業をサポート
学びがいっぱい

情報配信サービス **エデュフル**

“今ほしい”情報が盛りだくさん!!

啓林館からのお知らせも配信中!

「エデュフル」とは、先生の授業づくりをサポートする啓林館の情報配信サービス。各学年・各教科（小学校：算数・理科・英語・生活）（中学校：数学・理科・英語）毎の指導のポイントや、児童・生徒たちが興味を持つ授業づくりのアイディア、啓林館からのお知らせ等を直接お届けします。

登録はスマホでカンタンに!

LINEで登録
下記のQRコードを読み取り、お友達登録!
小学校 中学校

Webページで登録
下記のQRコードを読み取り、登録!
小学校 中学校

メールで登録
小学校 keirin@req.jp宛に空メールを送信し、登録!
中学校 keirin2@req.jp宛に空メールを送信し、登録!

啓林館エデュフル 検索　啓林館 中学校エデュフル 検索

中学校

KEY magazine【キー・マガジン】
中学校版

啓林館がお届けする英語教育情報コンテンツ。先生方と子どもたちに“ちょっとしたコツ”や“なるほど情報”を提供します。

先生たちの「お悩み」や「不安」の解消に!

高等学校

Vision Quest
総合英語 Ultimate
2nd Edition

A5判　752ページ
カラー刷
定価1,800円
（本体1,636円＋税10%）

付録（生徒用）
Vision Quest 基本例文集＋
English Writing Trainer
（A5 判, 112ページ）

付属品（一括採用で1部）
教師用問題作成 DVD-ROM

基礎から難関大学受験まで
確実にサポート

知が啓く。 啓林館

本　社	〒543-0052 大阪市天王寺区大道4丁目3番25号	電話（06）6779-1531
東京支社	〒113-0023 東京都文京区向丘2丁目3番10号	電話（03）3814-2151
北海道支社	〒060-0062 札幌市中央区南二条西9丁目1番2号 サンケン札幌ビル1階	電話（011）271-2022
東海支社	〒460-0002 名古屋市中区丸の内1丁目15番20号 ie丸の内ビルディング1階	電話（052）231-0125
広島支社	〒732-0052 広島市東区光町1丁目10番19号 日本生命広島光町ビル6階	電話（082）261-7246
九州支社	〒810-0022 福岡市中央区薬院1丁目5番6号 ハイヒルズビル5階	電話（092）725-6677

https://www.shinko-keirin.co.jp/

自由研究発表　第７室　⑤　（13:50～14:20）SNS×

Machine Translation – friend or foe – using MT in EFL process writing

Harumi, HOOD（仁愛大学）
Michael, KUZIW（Jin-ai University）

For language teachers, the students' use of computer translation applications (= machine translation, MT, hereafter) has been problematic. One concern is that students will cease to think for themselves and stop outputting the target language. If they start to be totally dependent on MT, it will be extremely difficult for them to acquire productive skills. Another problem is frequent mistranslations by MT, which, in many cases, are caused by the distance between the students' native language and the target language. However, since MT has started to apply AI, such tools often produce translations that resemble those of native speakers. It has become much easier and more convenient for foreign language users to use MT. Since students will surely continue to use MT in the future, teachers need to consider, first, how to prevent MT from obstructing students' improvement of their language skills, and second, how best to guide students to use MT so as to improve their language skills.

Our project started with a survey of the second-year students in our General English course this April. We asked student about their experiences with MT and set them five sessions of process writing (① brain-storming about the composition topic, ② writing the first draft, ③ rewriting the second draft using a checklist and MT, ④ explanation of how and why these changes were made, ⑤ teachers' edit, ⑥ rewriting and sharing/posting the third draft). We will carry out a survey after these five sessions, and assess the changes in students' attitudes and ideas about MT and their confidence. Starting in April, the. project will conclude with a final survey in July. We will investigate whether this project might help students take control of their authorship and build confidence in their ability to improve their language skills, specifically writing, and become autonomous learners.

In this presentation of a "work in progress", we will report on the project's progress and we welcome feedback from the audience on how this project is being conducted and its replicability in other classrooms.

自由研究発表　第７室　⑥　（14:30～15:00）SNS×

大学生の英語ライティング活動におけるデジタルツール活用の実態と意識の変化

加藤 由美子（ベネッセ教育総合研究所）、津久井 貴之（群馬大学）
細井 夏木（ベネッセ教育総合研究所）、髙木 亜希子（青山学院大学）

本研究の目的は、大学生に英語ライティング指導を行い、学習者のデジタルツール使用の実態と意識の変化を把握し、ツール使用の利点と課題を明らかにすることである。本研究は、機械翻訳や生成 AI などの英語力の代替機能を持つツールを、英語学習支援のツールとして活用できないかという課題認識に基づいたものである。

研究対象者は、英語科教職課程履修生の大学２年生 21 名で週１回・15 分のライティングタスクを計８回実施した。その際、学生は翻訳、添削、生成 AI などあらゆるツールを自由に使ってよいものとした。データ収集法として、８回の

タスク前後に、学生に対してアンケート調査（評定型と自由記述型）を行った。また、英語力の違いによる使用方法と意識の相違を明らかにするためにGTEC Academicを実施した。

アンケート調査の自由記述における機械翻訳や添削ツールを使用する目的、利点や課題についてテーマ分析の結果、ツール使用の英語力向上への影響、ツール使用への意見や考え、ツール技術への評価に関して、タスク前後の両方の記述からポジティブ・ネガティブ両面の意識や考えが浮かび上がってきた。タスク前後で比較すると、GTEC のライティングスコアを伸ばした学生の記述では、英語力や英語学習意欲の向上、使い方の注意に関するものが増えたのに対し、スコアがあまり伸びなかった学生の記述では、英語学習不安の軽減、英語力の低下やツールの使いすぎへの懸念に関するものが増えていた。また、ツールを使用したタスクの継続による英語力の向上については、伸びたと思うと回答した学生と伸びたと思わないと回答した学生がおり、伸びたと思う理由あるいは伸びたと思わない理由や伸びたと思う学生のツール使用の工夫に関する自由記述の分析結果からも示唆が得られた。

本研究で得られたことをもとに、機械翻訳や添削ツールを活用して、ライティングへの学習意欲やライティング力向上を目指した指導モデルを作成した。

自由研究発表　第7室　⑦　（15:10～15:40）SNS×

ICTの応用と英語教育：楽しさが学習持続性に与える影響の探究

阿部 恭子（石川県立金沢北陵高等学校）

ICT の進化は教育分野に革新をもたらしており、特に言語教育においては個別化された効果的な学習環境の構築に大きな可能性を秘めています。しかし、従来の教育方法と比較すると、デジタルメディアを活用した教育が学習者のモチベーションや学習成果にどのように影響するかについては、十分に理解されていません。本研究では、生徒の興味に基づいたデジタルメディア（学習アプリや動画）の使用が、学習意欲や持続性にどのような影響を与えるかを明らかにすることを目的に実施しました。研究方法としては、本校の高校1年生40名を対象にランダムに二つのグループに分け、一方のグループは興味に基づくICTツールを用いた授業を行い、もう一方のグループは教科書に基づいたICTツールを用いた教材を使用しました。学習アプリでは、「楽しい」と感じられる英文法の学習、発音矯正、語彙学習を提供し、動画では教科書の内容に関連した動画や生徒が興味を持つ映画を教材として用いました。評価は、学習終了後のアンケート調査と教師によるインタビューを通じて行い、学習内容に対する満足度、学習意欲、持続性、自己効力感を測定しました。研究結果から、生徒の興味に基づいたICTツールを使用したグループは、教科書に基づいた教材を使用したグループに比べて、学習意欲や自己効力感が有意に高いことが明らかになりました。また、学習内容に対する満足度や学習持続性も向上しており、デジタルメディアが提供するインタラクティブな学習体験がこれらの向上に寄与していることが示されました。本研究は、生徒が「楽しい」と感じ、興味を持つデジタルメディアの活用が学習のモチベーションを高め、持続性を支える効果的な方法であることを示しました。

自由研究発表　第８室　⑤　（13:50～14:20）

教室内において英語学習者が感じる不安と習熟度テスト得点との関連について

野本 尚美（仁愛女子短期大学）
上村 英男（福岡工業大学短期大学部）

心理学辞典(1981)によれば、不安とは「自己の将来に起こりそうな危険や苦痛の可能性を感じて生じる不快な情動現象」と定義されている。また外国語不安（language anxiety）とは、「学習者が第二言語・外国語を用いて何かをすることを期待されたときに起こる不安感」と定義されている（Gardner & MacIntyre, 1993）。先行研究では、学国語を学習する状況において聞く活動と話す活動を行う際に不安が高まり、特に、最も不安をかき立てるものは外国語で「話す」という行為であると言われている（Horwitz, Horwitz, & Cope, 1986）。また、いくつかの研究において不安と外国語の習得度や成績には負の相関があることが示されている（Aida,1994 など）。本研究の目的は、学習者が教室内で行う活動についてどの程度の不安を感じているか調査することと、それらが英語習熟度テストとどのように関連しているのかについて明らかにすることである。非英語専攻の女子短期大学１回生 73 名を対象として、英語の授業中に行う活動 21 個について、それぞれどの程度不安を感じるか 10 段階で回答させるアンケート（全くまたはほとんど不安を感じない場合は 0～2、多少の不安を感じる場合は 3～7、かなり不安を感じる場合は 8～10 の数値を記入）を実施したところ、「英文を覚えてクラス全体の前で発表する」、「自分の気持ちや考えについてクラス全体の前で英語で発表する」などの活動は全体的な平均値が高い結果となった。また、英語習熟度テストとの相関について調べたところ、話す活動だけでなく「教科書や問題集の英文を日本語に訳す」、「自分の気持ちや考えを英語で書いて先生に見せる」といった活動についても弱い負の相関が見られた。本発表ではこの結果に基づき、教室内において英語学習者が感じる不安に関する課題と、不安を感じにくくするための工夫について報告する。

自由研究発表　第８室　⑥　（14:30～15:00） **SNS×**

国際交流ビデオコンテストで育む異文化間コミュニケーション能力

市川 裕理（豊田工業高等専門学校）

異文化間コミュニケーション能力（intercultural communication competence）のモデルでは言語学習は単に情報伝達のための知識と技能の習得ではなく、異文化間における人間関係構築のための機会であるべきとしている（Byram, 1997）。本発表はオンラインで行っている国際交流ビデオコンテストが異文化体験の場としてだけではなく、SDGs という共通の国際目標について協働で解決へのアイディアを考え出すプロセスを通して、異文化間コミュニケーション能力の育成につながることを示唆するものである。コンテストはコロナ禍における学生の国際交流の機会を確保し、英語によるコミュニケーション能力の向上を図るために始めた。その内容は日本人学生と海外学生がペアになり、約半年かけて全部で４本の動画を作成し、途中でフィードバックやサポートを行いながら審査も含めすべてオンラインで行われ DX による国際交流の事例となった。当初英語学習の機会としていたコンテストがそれ以上の意味を持つと思われたのは、SDGs をテーマに設定したこと、半年にわたる長い活動期間でペアの人間関係がコンテストへの参加と結果に影響することがわかったからである。発表では過去５回にわたる実践で得られた審査動向、参加学生のコメントやインタビューを分析し、コンテスト活動でどのような学びが起こったかを評価し、それらを異文化間コミュニケーション能力のモデルの５要素である批判的文化アウェアネス、態度、知識、解釈と関連付けのスキル、発見とやりとりのスキルに関連付けて論じる。国際交流ビデオコンテストは教室外での活動であるので、目的や手法などが常に修正可能であるが、

これら成果と課題を踏まえた場合、英語授業活動における異文化間コミュニケーション能力の育成はどの点において可能となるのか示唆を述べたい。

自由研究発表　第８室　⑦　（15:10～15:40）SNS×

日本人中学生と台湾人中学生による遠隔協同授業の実践事例 －英語学習への意識の変容に対する探索的調査－

佐藤 大輔（上越教育大学附属中学校）
大場 浩正（上越教育大学）

ICT 技術の急速な発展により、海外とオンラインで交流する遠隔協同授業の実施が容易になった。しかし、多くの実践では、多様な人々との友好的な関係を構築するための異文化理解を前提とした表面的な情報交換に終わっているという批判も少なくない。生成 AI や ICT 技術のさらなる進化により今後の英語教育の在り方が問われる中、海外とのオンライン交流により多様な他者とつながることの価値を見出し、生涯に渡り英語を学び続ける学習者の育成が不可欠であるだろう。

本実践研究は、日本人中学生と台湾人中学生による Zoom を用いた２回の遠隔協同授業を通して、日本人中学生が英語という言語を学ぶ価値をどのように追究するかを調査する。本実践の対象は、新潟県内の国立大学附属中学校３年生 109 名（３学級）と台北市の私立中学校 76 名（３学級）であった。また、交流は、日本人中学生と台湾人中学生それぞれ２名からなる１８グループを設定して２回行った。１回目の交流では、自己紹介や互いの学校生活など身近な話題についてやり取りを行った。２回目の交流では、１回目の交流後に台湾人中学生に Google Forms で質問した「日本について知りたいこと」に対して回答した。交流の成果として、相手のニーズに対して、相手に伝えたいという思いを基に、即興で自分の考えや気持ちを伝える姿が見られた。また、１回目の交流前と２回目の交流後に“What is English for you?”という問いに対する記述内容の分析から、多くの日本人中学生の英語学習に対する意識にポジティブな変容が見られた一方で、台湾人中学生との２回の交流の前後で英語学習への意識に変容が見られなかった生徒がいた。台湾人中学生との交流の事前事後で英語学習への意識に変容が見られた生徒と見られなかった生徒を複数抽出し、それぞれの結果の要因を探索的に調査し、そのような違いが生まれる要因を考察する。

自由研究発表　第9室　⑤　(13:50～14:20) SNS×

A Case Study of a Novice English Teacher's Beliefs on Teaching at KOSEN through Mentoring

Hiroto, YAMAMURA（National Institute of Technology, Toyama College）
Shinya, OHATA（National Institute of Technology, Toyama College）

Japanese teachers of English usually experience theory-oriented teaching methodology courses and lesson studies at pre-service and in-service stages, both of which are said to be insufficient in quality and quantity (Takahashi, 2022). There are few opportunities for acquiring practical teaching skills and most in-service teachers think of lesson studies as ceremonial (Kage&Fujimoto, 2017) and something that add extra burden on their shoulders. In higher education institutions, where teachers with different research interests teach English for general purposes, there are no formal occasions for lesson studies, despite the fact that some are inexperienced in teaching when hired. There is little research on the professional development of English teachers in higher education.

The purpose of the present case study is to explore how classroom teachings and beliefs of one male novice English teacher (hereafter, practitioner) at a higher education institution, National Institute of Technology (KOSEN), change or not over time through mentoring. This research particularly focuses on what beliefs the practitioner holds about learning and teaching of English as a foreign language. The author is the mentor of the practitioner, who has a one-year previous experience of teaching English at a senior high school in Shizuoka in a temporary position.

In the 2023 academic year, when he started his career at KOSEN, fourteen 90-minute lessons of English communication Ⅰ were observed by the mentor and a post-observation session was followed each time in which the author gave feedback on teaching and also asked intentions and reasons behind teaching when some beliefs became apparent. After each session, the practitioner kept a journal as well. All post-observations sessions were audio-recorded and transcribed. Data, including the journal writings, were analysed and coded. The results revealed that the practitioner thinks it is important to teach reading by grammatical parsing with little emphasis on having students use English for the purpose of communication via speaking and writing. These beliefs could be attributed partly to his own learning history and his research interests: a linguistic approach to second language acquisition. Findings also showed some changes in his beliefs throughout the year.

自由研究発表　第９室　⑥　（14:30～15:00）

Language awareness of Japanese university language learners after their study abroad sojourn

土屋 加恵（南山大学大学院研修生）

In the last few decades, more people are moving across countries and cultures. Some recent theories and studies which take a social and critical perspective on language learning, highlight the diversity not only of the forms of English, but also of languages of individual people. In this context, it is argued that the languages of individuals cannot be fully understood within a traditional framework such as a mother tongue, a second language, and a foreign language. This diverse nature of languages and its value, however, less acknowledged among policy makers and students in Japanese educational context (Seargeant, 2019). This presentation will outline the preliminary findings of a research study, which examines language awareness of Japanese university English learners. Drawing on the cases of two female students, who studied abroad and learned English and another language such as Swedish and Korean there, the study explores whether the students' multilingual awareness has improved after studying abroad. To capture the learners' awareness of several languages, the study employed an interview method, which incorporated the perspective of life history research, and a visual method of language portrait. This presentation will provide each student's narrative account regarding the perception about languages and reflection on their sojourn experience. Then, the presentation will show the results from the first stage of the analysis in the project, which considers the relation between each student's language awareness and their language learning behavior and language use in different contexts. It is hoped that the study will give insights for considering people's beliefs about and attitudes towards languages.

自由研究発表　第９室　⑦　（15:10～15:40）SNS×

教員養成課程で学ぶ学生の小学校での英語音声指導に対する意識―統合的フォニックス学習の前後を比較して―

尾上 利美（和歌山大学）

2020 年度から小学校で全面実施となった外国語科では、言語材料として「現代の標準的な発音」を扱われている。また、中学校外国語科での指導事項「発音と綴りとを関連付けて指導すること」と、小学校の「音声と文字とを関連づけて指導すること」は異なることが示されているが、「英語の音声の特徴に気付かせ、必要に応じて発音練習などを通して指導するようにする」「語の中から文字を取り出して行う発音練習」が求められている（文部科学省、2018、p. 130）。このように、小学校で外国語科の授業を担当する教員は、上述のような英語音声指導や文字を関連づけた音声指導を行う必要があるが、教員養成課程で学ぶ学生は、小学校でのこのような指導についてどのような考えを持っているのだろうか。また、文字を関連づけた音声指導の一つの方法である統合的フォニックスを学習することは、学生の意識に影響を及ぼすのだろうか。

本発表では、初等英語科教育法の受講生に対して行った事前アンケート（統合フォニックス学習前）と事後アンケー

ト（統合フォニックス学習後）の結果をもとに、主に次の２つの項目①英語の発音・未知の単語の音声化・音と文字のルールを教えること・小学校で英語音声の指導をすることに対する自信②小学校で英語音声の指導をする時にどのようなことに気をつける必要があると考えているかについて報告する。

自由研究発表　第 10 室　⑤　（13:50～14:20）SNS×

Work in Progress

大学英語教育における文学作品の活用―調査方法と教材化の検討―

田中 真由美（武庫川女子大学）

発表者は英語文学テクストを用いた批判的応用言語学に基づくクリティカル・リーディングに関する共同研究に取り組んでいる。共同研究者は 2 名おり、それぞれ英語圏の児童文学とアメリカ文学を専門としている。研究 1 年目の 2023 年度は、英語教材としての文学作品の調査、文学作品研究、リーディングの教材・シラバス・指導マニュアルの作成を行った。英語教育における文学教材に関する研究では、新刊書の出版点数に関する調査等が行われ、1990 年代以降、文学作品を用いた大学用英語教材の数が減少していることが報告されている（e.g., 江利川, 2008;　髙橋, 2015）。出版された教科書の調査によって文学作品の英語教育における活用状況をある程度把握できるが、大学では作品の原書を教科書として使用する場合もある。そこで発表者は日本の大学の英語リーディング科目のシラバスを検索し、実際に使用されている文学作品をリスト化した（田中, 2024）。シラバス検索では、科目の主たる目的が英語教育であるか、文学教育であるかを特定することが困難な場合があった。リスト化の際には、「イギリス文学」や「アメリカ文学」など、国別で分類する際に判断に迷うことがあった。今後、同様の調査を行いたいと考えており、本発表ではその方法について議論したい。シラバス調査に加え、F. H. バーネットの The Secret Garden（1911）に関する共同研究者による作品研究（福本, 2024）を踏まえたリーディングの教材と指導用マニュアルを作成した。教材の使用対象者は英語（英語文学・英語学・英語教育）を専攻とする大学 1 年生である。本文に注をつけ、クリティカル・リーディングの設問や基本的な文学用語を用いた設問を含むワークシートを作成した。本発表では、文学作品の教材化に関する情報共有も行いたい。

自由研究発表　第 10 室　⑥　（14:30～15:00）

『不思議の国のアリス』を用いた言語横断的な英語教育

金子 史彦（信州大学）

ルイス・キャロル著の『不思議の国のアリス』は様々な英語の言葉遊びに溢れており、内容のみならず、それが書かれている言葉そのものにも注意向けさせる作品である。この作品の言葉遊びを和訳する場合には、内容というソフト面と言葉というハード面の両方を日本語で再現することを考えなくてはならない。否応なしに翻訳という作業そのもの、そして英語と日本語の性質について考えるようになる。ガイ・クック (2012) は翻訳困難な言葉遊びを外国語教育に取り入れることで「なぜ訳がこれほど難しく、またときには実際不可能でさえあるのかを理解」させ、「それぞれの言語に特有の要素に焦点を当て、それを頭の中に定着させ、翻訳ではなく原文を読むことの必要性を示すことができる」と述べる。本研究は、『不思議の国のアリス』はこのような教育的な狙いに適うものであるとの仮説に基づき、同作品を用いた調査を通じて英語と日本語の言語横断的な理解と、原文を読むことの必要性の理解の相関関係を測ることを目的とした。

調査材料には『不思議の国のアリス』の中でも最も和訳が困難と思われる言葉遊び、VO 言語である英語の特性を前提としたものを選んだ。OV 言語である日本語で再現するのが難しく、数ある翻訳でも成功しているものは見受けられない。本調査の協力者である 17 名の大学生に、まずこれを和訳させ (タスク 1) 、次にそれについて考えさせ (タスク 2) 、そしてその箇所の様々な和訳の例を見せ、原文を読まずに和訳だけを読んだ場合理解することが出来るかについて考えさせた (タスク 3) 。この調査の回答の分析結果から、英語と日本語の言語横断的な理解と、原文を読むことの必

要性の理解には正の相関関係が認められた。そのような分析結果から明らかになったことを詳細に発表し、『不思議の国のアリス』を用いた言語横断的な英語教育について考察する。

自由研究発表　第１０室　⑦　（15:10～15:40）SNS×

評価基準は評価規準の達成度を測るための指標たりえているか

駒井 健吾（長野保健医療大学）

現行の学習指導要領が高等学校に施行されて 2 年以上が経ち、2024 年度は中 1～高 3 のすべての学年が「観点別学習状況の評価」を取り入れた教育を行っている。英語教育における言語活動と評価の一体化も強く求められており、パフォーマンステストの実施も徐々に拡大し始めている（文部科学省、2023）。学習指導要領は単元ごとの評価規準の設定に関し、かなり厳密な基準を設けているが（国立教育政策研究所、2020）、一方、それぞれの言語活動を評価するための評価基準の設定に関しては、指導上の工夫や生徒の実態に即して「評価の場面や方法を工夫」することを期待してか、厳格には定めていない。このため、評価基準として実際に作成され用いられているルーブリックの内容は多種多様であることが予想され、指導内容に対する妥当性や評価の一貫性に関し、検証を要する事例が多数生じている可能性も考えられる。

そこで本研究では、国や県、政令指定都市などが中高の英語教育の指導・評価の参考資料としてウェブ上にあげている事例を取り上げ、①用いられている評価基準の文言の傾向をあぶり出し、②それぞれの評価基準が単元もしくは本時の目標（評価規準）に対しどの程度妥当であるかを探索的・解釈的な方法で分析し、③「指導と評価の一体化」の適切な実施にあたって押さえておくべき点を検討した。②、③については、欧米で集団基準準拠評価から目標基準準拠評価への移行による教育改革を実施していた只中にあって、それぞれの評価方法の利点と陥りやすい陥穽を網羅的・包括的に論じていたギップスの論考（Gipps, 1994）を主に参照した。その結果、①に関しては、複数の行動要件の設定と言語材料の用い方の正確性などの指標が混在しており、②目標から想定される指導とその効果に対し妥当性の度合いが低いと思われる事例も少なからず見られ、③における注意点をふまえ、今後より具体的な指針を提示していく必要性があることが判明した。

自由研究発表　第 11 室　⑤　（13:50～14:20）

英語力ランキング批判：EF-EPI, TOEFL スコア，英語教育実施状況調査

寺沢 拓敬（関西学院大学）
奥住 桂（埼玉大学）
浦野 研（北海学園大学）

近年，英語教育に関する議論において，英語力ランキングが頻繁に持ち出される。たとえば，EF 社の英語能力指数（EF-EPI）や TOEFL スコアを流用した国際ランキング，あるいは，英語教育実施状況調査を流用した都道府県ランキングである。本発表では，こうしたランキングは，科学的・統計学的に正しくないばかりか，政策形成にとっても現場の実践にとっても負の影響が大きいことを論じる。先行研究にも，TOEFL スコアランキングのような「統計の誤用」を方法論的な観点から批判したものはある。しかしながら，この現象を広範な社会的文脈に置きながら，誤用の蔓延の背景およびその影響（主に，負の影響）を批判的に検討した研究はまだない。そこで本発表では，日本社会において英語力ランキングがどのように生み出され，どのように私たちに影響を及ぼし得るのかを批判的に検討する。具体的には，次の点を論じる。第一に，EF-EPI や TOEFL スコアを用いた国際英語ランキングがいかに統計学的に間違っているかを論じる。第二に，英語教育実施状況調査を用いた都道府県ランキングをめぐる，測定上および調査実施上の問題を指摘する。第三に，こうしたランキングが実際にどのような負の影響を及ぼし得るのかを，教育実践への影響，政策への影響，そして英語教育学コミュニティへの影響という 3 つの観点から検討する。

自由研究発表　第 11 室　⑥　（14:30～15:00） **SNS×**

私教育を選択する親から考える早期英語教育―英語格差構造の一見解として

山村 真由美（名古屋芸術大学）

本論は「私」教育を選択する親の早期英語教育への取り組み、意向、期待されているものを明らかにし、「公」と「私」に向けて今後の課題および示唆を提供することを目的とするものである。 近年問題視されている「教育格差」、「英語格差」の関係性を親の立場から考え、英語格差をさらに広げないために「公」教育と「私」教育それぞれに求められている存在価値と重要性を考察する。 これまで教育格差の要因となる学校選択、学歴達成や社会資源の分配に関する不平等の問題は、長きにおいて注目され議論が行われてきている。教育格差を生じさせる背景に大きく関わると推察される家庭教育の担い手である親の教育戦略は、教育は個人の家庭の責任としながらも格差を助長させる誘因の１つであるとして実証的な研究の蓄積がある。 そのような教育格差の中でも特に英語格差に焦点を当てる理由は、小学校教育教育課程での英語教育低年齢化を受け、関心が高まるとともに今後さらに広がる懸念が見込まれるからだ。 子の幼少期より選択的に投資を行い、英語の獲得を目指す親は日本社会の中で無料で一律に提供されている「公」教育を選ばず、「私」教育を選ぶことで何を志しているのか、英語学習と「私」教育にはどのような繋がりがあるのか、英語格差と教育格差はどう結びついているのかを考察することは今後の英語教育の発展において重要なことだと考える。 調査方法として、教育格差を引き起こすとされる親の学校選択の代表に、私立小学校進学および私立中学受験意向を置き、そのような教育差別化を行う親の、「私」教育と英語格差の代表要因である早期英語教育の価値や「公」教育では得られないと考えるものについて個別インタビューを行った。結果、親は意図的に「公」からの離脱による差別化を試み、英語教育を重要視すればするほど、「私」教育を選択していることが明らかとなった。

自由研究発表　第１１室　⑦　（15:10～15:40）SNS×

「オンライン交流を通して相手意識を明確にし、「聞きたい」「話したい」というコミュニケーション意欲を促進する外国語科授業のあり方」

徳永 典子（長野市立古牧小学校）

本発表は、オンラインでの交流などを通して相手意識を明確にし、「聞きたい」「話したい」というコミュニケーションを支える意欲を促進する実践を報告するものである。オンライン交流を始めたきっかけは、児童が人前で発表をしたがらないのは、恥ずしさや英語を知らないからではないかと考えていたが、これに疑問をもったことだ。単純に英語がおもしろくない、すなわち英語の使用にリアリティがないことに起因しているのではないかと考えた。そこで、できるだけ色んな人と会話ができるようにオンライン交流を取り入れ、相手の話を「聞きたい」、自分の本当のことを「話したい」、という意欲を引き出していく方法を模索した。主な単元は「Welcome to Japan.」（Here We Go！6　光村図書　Unit2）、「My Best Memory」（Unit 7）、「What do you want to be ?」（Unit 8）、「Junior High School Life」（Unit 9）に関連した内容で、他県の小学６年生、同じ中学校区の小学６年生、中学１年生と行った。 一方で、文部科学省「外国語指導における ICT 活用」（令和４年度調査）の結果によると、「児童生徒が遠隔地の児童生徒等と英語で話をして交流する活動」に対して、小学校の実施は 11.4%ということがわかった。ICT の活用やそれによって可能になった学習活動の可能性が言われているにもかかわらず、遠隔地との交流はあまり行われていないのが現状である。小学校での外国語の授業では、知りたいと思う相手のことや本当に伝えたい自分のことなどについて英語を使って伝え合う体験をすることが、これからの学びの中で生きる力になるものと考える。 本発表では、オンライン交流によってコミュニケーションすることの楽しさを体験することに基づいて、相手意識を明確にした外国語科の授業についての示唆と、今後の課題を紹介する。